

コラム「社会からみる肥満症」

1. 要旨

フェリペ・フェルナンデス＝アルメストの「Near a Thousand Tables (邦題「食べる人類誌」)は、「食」をあらゆる角度から、そして人類の発展「革命」という大きな視点で捉えている。

文化を創り出す社会的行動のはじまりとして「食」とは切り離せない「調理」にスポットをあて、その行動の起源から、牧畜、農業、調理法の産業革命であった缶詰製法など、産業を推進する力としての食物を探る。

世界最古の家畜としての「かたつむり」、社会的地位の指標としての「胴回り」、異文化混合のかたちである「テキサス流メキシコ風味」など例をあげて、儀式と魔法という観点からも「食」について言及している。

終盤、「ファストフードを食べる人々の孤独」や共同体の行為から私たちを疎外する電子レンジ料理の「非社会的効果」について述べる。

「食物は喜びを与えてくれる、そして良くも悪くも食べる人を変えることができる」著者は食物には人間を変える力があると訴える。「次の革命の役割は食物の悪い影響を打破することだ」。

より良く生きることと食とは、切り離せないことが浮き彫りになり興味深い。

食物には人を変える力がある

〔食べる人類誌、早川書房、2003より〕

2. コメント

食事には力がある、というのは単に栄養としてばかりではなく人類の発展として考える、社会や文化やそして人間の行動をかえさせるような力があることをあらためて認識させる。

(編集部)